

房総半島南端の陸上で深海底探検?! -付加体層序学展示, てんまつ記-

川上俊介¹⁾

私は、大学での卒業論文から10年近く房総半島南部の地質に携わっている。現在は、産業技術総合研究所に非常勤職員としてやっかいになっている。その縁あって、今回初めて2004年の地質情報展に展示者として参加することが出来た(写真1)。本報告では、自分の雑感をもとに時系列順に情報展当日までの流れを振り返りたいと思う。

1. はじまり

2004年5月 地球惑星科学合同大会

合同大会での発表後、いつものように仲間が集まって呑みに行った。メンバーは三浦・房総半島関連の研究者や海洋研究開発機構での海洋調査で一緒になった仲間だ。その中に千葉県立中央博物館の高橋直樹さんがいた。何気ない会話の中に地質情報展の話があったものの、自分は非常勤職員であり、それに関係することはないだろうと考えていた。

合同大会から一ヵ月後

地質調査企画室の西岡さんに「房総半島の地質でトピックはないか?」と聞かれ、冗談のつもりで「房総半島南端部には世界で最も新しい陸上付加体が露出します!」と言ったところ、そのまま展示として参加することになった。「冗談のつもりで」とは、房総半島に第三系の付加体が存在するか否かについては現在でも賛否両論があるからである。

2. 展示の製作

6月17日 初顔合わせ

地質情報展の主旨について説明があり、「地域の人への地質の説明と後継者(子供たち)への普及

展示」を行うと説明された。私は、卒論生時代から10年近く房総半島に通い、地域の人々には大変お世話になってきたので出来る限りのことをしてみようと考えた。が、最初の正式タイトルおよび三行広告の締め切りが一週間後の6月25日であることは、初参加の私には正直負担であった。

6月19日

神奈川地団研の江ノ島巡検に参加前日、元横須賀市博物館の蟹江康光・由紀夫妻宅に泊めていただき、情報展のタイトルと三行広告について相談しあった。その結果、タイトルおよび三行広告のタキ台が出来た。

6月21日

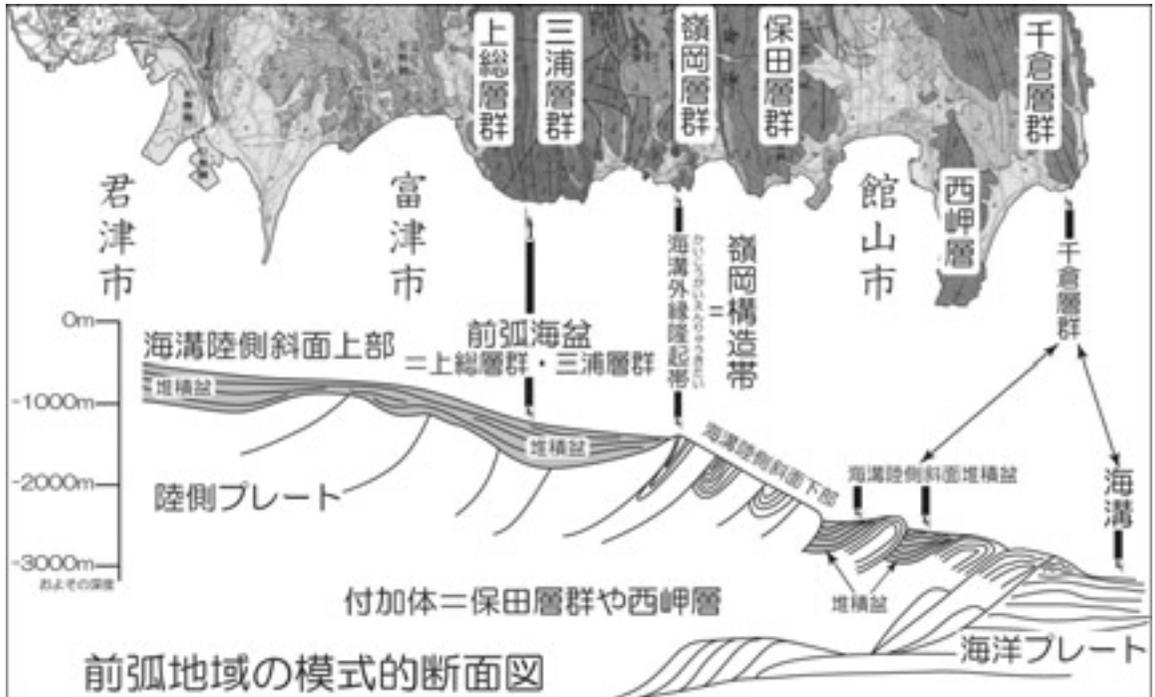
江ノ島から帰り、「館山」図幅で一緒に仕事をしている活断層センターの宍倉さんと知り合いの女性にタイトルと三行広告のタキ台を送り感想を求めた。その結果、「房総半島南端の陸上で深海底探検?!」というタイトルに決定したのであるが、原案では「付加体云々...」というような小難しいタイトルであり、最終版のタイトルは宍倉さんのアイデアが大である。ちなみに知り合いの女性からは「付加体っ



写真1 付加体層序学の展示コーナー(右側手前)。

1) 産総研 地質情報研究部門 島弧堆積盆研究グループ

キーワード: 房総半島南端, 陸上, 深海底, 付加体層序



第1図 房総半島と“付加体”の関係って？ 房総半島は度重なる地殻変動によって深海から陸上に現れた世界で最も新しい陸上付加体が分布する地域なのである！（図上方の地質図は地質調査総合センター発行の20万分の1地質図「横須賀」および「東京」を編集利用した）

て何なの?!」と予想どおりの質問。ともあれ自分が思っている常識的知識などは全くの非常識であることに気付いた。数日後にタイトルと三行広告を無事提出した。

ポスター製作

7月の第3週から海の日の連休にかけてポスターを製作した。地質情報展への初参加であり、どのような形で完成原稿を提出すればよいか分からず四苦八苦した。A0用紙3枚分のスペースを与えられていたため、当初から、1枚目は「深海堆積物とプレートテクトニクス・付加体の学問的解説」、2枚目は「プレートテクトニクスの観点に立った房総半島の地層の解釈(第1図)」, 3枚目は「野外観察」といったポスターの話の流れを考えていた。

体験コーナーとは異なり壁展示は、文字通り“壁の華”と考え、人目を引くように、私らしい展示を作ろうと考えた。

展示全体を通して伝えたいメッセージは簡潔で“房総半島の大地は地質学的にみても素晴らしい”ということで「房総半島は世界に誇れる深海堆積

物の好フィールドなんだ!」と展示の最後を締めくくった。“恐竜化石が出る”とか“キレイな宝石が取れる”といったわかりやすいトピックがあればいいのだが、房総にはそれらが全くない、しかしその反面“学問的な興味深さ”があるということを強調したかった。

3. 地質情報展当日

9月17日 情報展会場設営

のんびりマイペースで行動していたら、大遅刻をしてしまい作業に間に合わず...

情報展当日

当初は展示前スペースを利用して沈み込みのモデル実験や本物の深海堆積物等の人目を引くものを用意しようと考えたものの結局間に合わなかった。そのスペースには、深田地質研究所の川村喜一郎氏より借用した“しんかい6500と一緒に深海底に潜ったラーメンカップ”(写真2)と“白ウリ貝類”を置いたのみとなった。また深海底を調査する“し

んかい6500”の説明として、前日に地質学会のポスター会場で海洋研究開発機構のブースで頂いたチラシを利用した。これら即席の展示物が思いのほか人目につくこととなり、多くの人と房総の地質について語り合う機会を得た。

本地質展の展示説明の方々には「何をどう説明していいかわからない」「(展示を通して)何が言いたいかわからない」等々のお叱りを受けた。私の個性でポスターを仕上げたため、常軌を逸してしまい意味不明な展示になったのかもしれない。しかし「深海底の堆積物が陸上に露出しているということ」に関しては、多くの人に興味を持っていただき、楽しく話が出来たと感じた。また、自宅周辺の地質について多くの質問を受け、いまさらながら生活と地質の関わりについて痛感した。しかし、まだまだ修行不足のための確に答えられたかどうか怪しい...また、体験コーナーの手伝いもしてみたものの、体験に来ている子供達よりもあからさまに実験が下手でへこたれた...

4. 反省と今後の展望

広いスペースが利用できたのだから、展示前スペースについてもっと有効利用すべきであった。再度参加する機会があれば、可能な限り現地をチェックし、観覧者の歩みを止めるだけの説得力のある楽しい展示を心がけたい。また、スペースの問題もあるが、少なからぬ方々が展示を逆順から回っていた。展示会場と順路の導線について一考する必要があるのではないだろうか？多くの観覧者は地質情報展を楽しみに来ているのであるから、一つのエンターテインメントとして楽しめるように、全体として一連の流れがあるように作り上げる必要があると思った。

私個人のアイデアであるが、折角、各々の県でその土地の地質・地形について展示するのであるから、一般向けの普及野外巡検会も博物館などの施設と協力して開催すればより楽しいものになると思う。主催者側としてはスケジュールおよびマンパワーの面で明らかに負担になるものの、地域の方々に地質・地形を説明し“地質屋”を認知してもらうためには絶好の機会であると考えられる。



写真2 “しんかい6500と一緒に潜ったラーメンカップ”(右)と“潜る前のラーメンカップ”(左)。

5. ご協力ありがとうございました!

展示冒頭の「館山湾からみた富士山」の写真を提供していただいた館山市の高野洋子さんと展示に際して相談に乗っていただいた千葉県立安房高等学校の高野仁先生、野外露頭写真「千倉町忽戸の地層の繰り返し構造」の写真を提供していただいた静岡大学の山本由弦博士、“しんかい6500と一緒に潜ったラーメンカップ”と“白ウリ貝の貝殻”を貸していただいた深田地質研究所の川村喜一郎氏、“潜る前のラーメンカップ”を提供していただいた産総研の中江 訓博士に深く感謝いたします。さらに、展示製作の様々なノウハウを教えて下さり叱咤激励して下さった元横須賀市立博物館の蟹江康光博士・蟹江由紀夫妻、筑波大学の小川勇二郎教授、千葉県立中央博物館の高橋直樹博士に深く感謝いたします。また、研究・生活ともに支え、快く地質調査に協力していただいた房総半島の方々に深く感謝いたします。最後に、地質情報展中の休憩の際に博物館の前でウクレレを弾いていたところ「サボらずにちゃんと仕事しろよ〜!」と叱咤激励?! していただいた地元の小学生をはじめとして、情報展に足を運んでいただき楽しんでいただいた全ての方々に感謝いたします。

KAWAKAMI Shunsuke (2005) : Deep Sea Floor Exploring on Land in the Southernmost Part of the Boso Peninsula?! -Inside the Exhibition of the Accretion Stratigraphy-

<受付: 2004年11月15日>